

(二〇二四年度)

国語

(二月二日実施)

次の文章は、上岡伸雄『風の教室』（中公文庫）の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

七月の初め、学芸会のグループ分けが決まった。

劇を希望したのはぼくのほかに二十人くらい。ガンモとヤッチャン、それにカズや長谷川たちのグループも「楽器はできないから」という理由で劇に來た。何だか体育会系の劇になりそう。リーダーは読書好きのやつがいいということで、男子は立崎、女子は高橋に決まった。

ほかはみんな合唱・合奏だった。リーダーは本西と堀井に決まった。本西がピアノがうまいのはみんなよく知っていたし、堀井も「楽器はいろいろできる」と転校してきたときに言ったからだ。ほかには相沢や福原、岡、上峰などがこちらに入った。⑦イガイだったのは、賢介もこっちに回ったことだ。ぼくと同じように、小さいときにちよつとピアノを習ったくらいで、たいして楽器はできないと思っていた。だから、冷やし半分にきいてみた。

「本西と一緒にいたかったのか？」

「おれ、本西のことなんか好きじゃねえよ」

賢介はこう言つて、ぼくを蹴飛ばそうとした。それから付け加えた。

「最近、①アネキと一緒にギターを習つてるんだ。だから、ちよつとこつちをやつてみたくなつたんだ」

へえ、受験を控えた賢介がギター？ ぼくはちよつと信じられなかった。

ちよつとこのころ、母さんがM中学の学校説明会に行き、パンフレットをもらつてきた。

「そりゃあね、国立の付属校に入つてくれたら、家計も助かるけど、あそこはすごく難しいからね。まあ、M中学なら家から近いし、わりとレベルも高いし、いいかしらね」

そんなことを言いながら、ダイニングのテーブルにパンフレットを置き、ぼくに見せようとする。

塾に行く⑧ジコクまであと一時間。ぼくは宿題が終わつていなかったで、ダイニングのテーブルで宿題をやつていた。それなのに母さんに話しかけられて、邪魔だなあと思つたけど、鉛筆を持つ手を止めた。

リビングからは弟がやつてゐるテレビゲームの電子音楽の音がピコピコ聞こえてくる。

「でも、ここだつてどんどん偏差値高くなつてゐるからね。今の成績じゃダメよ。がんばらないと」

「わかつてるよ」

こういう話つてうざつたいんだなあ、とぼくは思つた。ぼくは相変わらず塾のA組に入れない。だからこつちやつて勉強してゐるのに、その勉強をさえぎつて、①こういうことを言われるんじゃかなわない。

「M中学だつて、塾のA組に入れなきゃ無理よ。このところすごくがんばつて、進学の実績を上げてゐる学校だからね。ほら、お父さんとお母さんの行つた大学にも、これだけ進学してゐるわ」

母さんはそう言いながら、ぼくにパンフレットの「卒業生の進路」のところを見せた。ぼくはパンフレットを受け取つて、パラパラと見始めた。校長先生の挨拶とか、授業のカリキュラムなんかにはあまり興味がな。校舎はきれいかなとか、どんなクラブ活動ができるのかなとか思つて、写真のところをめくつてゐた。そうしたら、ひとつの写真に②目が釘づけになつた。中学生たちが楕円のボールをパスしてゐる写真だ。

「③あつ、ラグビー部があるんだ」

「あら、ほんと。へえ、中学校には珍しいわね。まあ、中高一貫校だからね。でも、まさか入るつもりじゃないでしょ？ ラグビーなんて、体の大きい人がやるスポーツよ」

「④そんなことないよ、身長百六十センチくらいで日本代表の人もいるんだって。ポジションによるんだよ」

「そういう人は運動神経抜群なのよ。あなたには無理、危ないし。熊沢先生のタッチラグビーは安全だって言うから、賛成したんだからね」

まあ、確かに、このところ放課後にラグビーをやっても、母さんは文句を言わなくなった。父さんが賛成してくれるようになったからだろう。でも、中学でラグビーをやるとなると、話が違うらしい。

「テニス部がいいじゃない。お父さんとお母さんもやってたし。⑤ほら、テニス部もあるわよ」

そう言って、母さんはテニス部の載っているページを開き、写真を見せた。

いつもこうだ。母さんはすぐにぼくをテニス部に入れたがる。サッカー少年団に入りたてのところ、中学校でもサッカーをやりたいと言ったときも、「サッカー部は運動神経抜群の子が入るのよ、あなたにはテニスがいいわよ」と言った。父さんからは「おまえは運動神経が鈍いんだから、がんばって運動しろ」とよく言われるんだけど、そのくせサッカーやラグビーに興味をもつと、母さんから「運動神経が鈍いんだからやめろ」って言われるんだ。これって変じゃないか？

父さんと母さんは同じ大学のテニスサークルに入っていた。それで知り合って、結婚したんだ。母さんはそのせいで、子どもにもテニスをやらせたがる。行く大学も、父さんと母さんが行った大学を勧める。ということは、ようするに父さんがやったスポーツをや、父さんが行った大学に行き、父さんのようなサラリーマンになれということだ。

ちょっと前までは、父さんと母さんの行った大学に行きたいと思っていた。やるスポーツもテニスでいいかと思っていた。父さんと母さんの卒業した大学には何度か連れて行かれたし、テニスサークルの集まりにも行ったことがある。大学のキャンパスはきれいだし、学園祭でお店をやっていた学生たちは⑥シンセツだったし、テニスサークルの人たちもいい人たちばかりだった。だから、この大学でテニスをやるのがいいんだとなんとなく思っていた。でも最近、⑥それが本当にいいのかどうかよくわからなくなってきた。

第一、「運動神経が鈍いからテニス」というのは、ちょっと違うんじゃないかって思うようになった。だって、運動神経が鈍ければ、テニスだってやっぱり下手なんだ。テニスなら上手になれるってわけじゃない。父さんと母さんは、ぼくの親だから、運動神経はよくない。母さんなんてかなりひどい。本人は「わたしは強い球は打てなかったけど、^{こうい}後衛でしぶとく粘ったのよ」なんて言っている。でも正直言って、母さんのテニスは当てて返しているだけだ。

⑦こんなことを考えるようになったのは、去年、父さんと母さんのテニスサークルのOB会に行ってからだ。OB同士の試合があつたんだけど、いかにも運動神経がよさそうで、テニスもうまい男の人と女の人が⑧フウフでペアになっていて、すべての試合に勝った。それはすごくカッコよかった。それに対して、父さんと母さんのペアは全部負けた。本人たちは「全然練習していないからしょうがない」と言っていたけど、とにかくカッコ悪かった。ようするに、父さんと母さんはテニスが下手同士で結婚したってことなんだ。それがわかってしまうと、なんだかテニスに興味もなくなってきた。

将来の仕事だって、自分が何をやりたいのかよくわからない。漫画を描くのは好きだけど、⑨カンタンに漫画家になれるわけじゃないのはわかってる。それに、ぜひともこういう漫画を描きたいというイメージもない。父さんのようなサラリーマンとなると、会社でどんな仕事をしているのかまったくわからないし、興味ももてない。だから、将来こういう大学に入って、こういう会社に入ろうっていう希望は何もない。今だって⑩何のために勉強しなくちゃいけないのか、中学受験しなくちゃいけないのか、よくわからないんだ。

誰かがアッシーに、「どうして勉強しなくちゃいけないんですか？」ときいたことがある。こんなことは六年生になる前にさんざん先生たちや親たちと話してきたことだ。それでも、アッシーは体育会系で、子どものときは全然勉強しなかったようなことを言うから、どんなことを言うのかきいてみたくなったんだらう。アッシーの答えはこうだった。

「大きな人間になるためだな」

「先生みたいに？」

そうガンモが **A** をいれると、みんな笑った。

「だからさ、幅の広い人間っていうことだよ。いろんなことに興味をもち、いろんなことを知っている人。そういう人のほうが、何も知らない人よりも心が豊かだ。人生のいろんな **⑧** キョクメンに対応しやすいし、間違った選択をしなくなる」

アッシーにしては平凡な答えのような気がして、みんなちよつと **B** 抜けしてみたかった。アッシーは続けた。

「それに、勉強しておいた方がいろんな可能性が広がるしね。たとえば子どものときにスポーツ選手になると決めて、**⑨** ドリョクする。それはとてもいいことだけど、それでまったく勉強をしなくなったら、スポーツ選手以外のものになる可能性を失ってしまう。それじゃ、ほかのものになりたくなったときに **⑩** コマっちゃうだろ？」

「先生は小学校の頃、野球の選手になるって決めて、勉強しなかったんですよね？」

とカズがたずねた。

「そうだ。だから、小学校の先生になりたいと思ったとき、大学に入り直したり、いろいろと遠回りしなきゃならなかった。だから、最初から勉強しておけばよかったって本当に思うんだよ」

⑨ なんだ、自分が勉強しなかったからそう思うのか、とぼくは思った。

「みんな、これからだんだんと、こういうことをやりたいとか、こういう職業に **⑪** ツきたいとか、いろいろと考えるようになるだろう。職業によつては、こういう大学のこういう学部を出てなきゃいけないとか、こういう資格試験を通らなきゃいけないとか、いろいろあるんだ。何かになりたいたいと思ったとき、その資格を取れる学校に入ってなかったり、それまで何も勉強してなかったとしたら、ゼロからやり直さなきゃいけないかもしれない」

アッシーはクラスを見回した。賢介や本西のことをとくに見つめたような気がした。

「たとえば中学受験についても、先生は悪いことだとは思わない。公立中学だって充分にいいと思うけど、がんばって私立や国立に行こうとするのも、いいことだと思うんだ。だって、そういう中学校に入っておくと、高校や大学の選択肢が広がるからね。もちろん、公立だつてがんばれば同じなんだけど」

アッシーがそのとき言ったのは、だいたいこういうことだったと思う。ぼくはM中学のパンフレットを見ながら、**⑩** そのときのアッシーの言葉を思い出していた。そして思った。

少なくともM中学に入れば、ラグビーをやれるという選択肢は広がるんだな。

問1 — **⑦** **⑧** **⑨** について、カタカナを漢字に直しなさい。

問2 — **①** 「こういうことを言われるんじゃないかなわない」について、このときのぼくの気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 成績を上げようと勉強しているのに、成績が下がってしまったので何も言えない
- イ 成績を上げようと勉強しているのに、もっと勉強をがんばれと言われるのはたまらない
- ウ 成績を上げようと勉強しているけれど、成績が上がっていないので母親には張り合えない
- エ 成績を上げようと勉強しているときに、受験校や偏差値の話をするタイミングの良さに感心する
- オ 成績を上げようと勉強しているときに、成績を上げるための助言をしてくれるのだから聞くしかない

問3 — **③** 「あつ、ラグビー部があるんだ」について、—— **⑩** 「そのときのアッシーの言葉を思い出していた」を踏まえて、このときのぼくの気持ちを説明しなさい。

問4 — ④「そんなことないよ」について、このときのぼくの気持ちとしてあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ラグビーという競技に対する母さんの思い込みを取り除きたい
イ ラグビー部に入りたいということを母さんに悟られないようにしたい
ウ ラグビーを危険な競技だとは思っていない母さんに魅力を伝えたい
エ 身長が小さくても十分活躍できる競技であることをわかってもらいたい
オ ラグビーにあまり関心がない母さんに少しでも詳しく知ってもらいたい

問5 — ⑤「ほら、テニス部もあるわよ」について、このように言われたときのぼくの気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 中学校は自分の将来の進路に合わせて選ぶべきであり、テニス部があるかどうかで決めるのはおかしい
イ ラグビーは運動神経が優れていないとできず、テニスは鈍くてもできるというのは、テニスに対して失礼だ
ウ 父や母と同じようにぼくもテニス部に入れようとするのはいいかげんやめてほしいし、この話題はうんざりだ
エ 父や母と同じようにぼくもテニス部に入ろうと思っているし、テニスのことを考えると受験をがんばれそうだし
オ 進学先に悩み、やりたいこともまだはつきりと決まっていないうぼくの興味を引こうとしてくれるのはありがたい

問6 — ⑦「こんなこと」について、——⑥「それ」の指す内容を踏まえて自分の言葉で六十字程度で説明しなさい。

問7 — ⑧「何のために勉強しなくちゃいけないのか」について、アッシーの考えを五十字程度で説明しなさい。

問8 —

A	B
---	---

にあてはまる語として最も適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|------|------|------|------|------|
| A | ア 活 | イ 口 | ウ 茶々 | エ 手 | オ メス |
| B | ア 冊子 | イ 障子 | ウ 調子 | エ 拍子 | オ 様子 |

問9 — ⑨「なんだ」の意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 我に返る イ 合点がいく ウ 興覚めする エ 気が動転する オ 投げやりになる

問10 本文の内容として正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 賢介はいろいろな楽器のできる堀井にその技術を教わりたいと思ひ、学芸会では合唱・合奏のグループに立候補した
イ M中学の受験の難しさを説くことで学習意欲を高めようとしてくれる母さんに、もっと上位校を目指すぼくは反発している
ウ ぼくが中学でラグビーをやることに母さんが文句を言わなくなったのは、父さんがこの競技をやることに賛成してくれたからだ
エ アッシーは野球選手を目指していたので、小学校では全く勉強をしておらず、小学校の先生になるために改めて勉強をやり直した
オ 両親の出身大学はキャンパスがきれいで学生も優しかったが、ぼくが今興味を持っていることがなさそうなので志望がゆらいでいる

問11 — ②「目が釘づけになった」とあるが、あなたの「目が釘づけになった」ときのことを教えてください。

受験番号
氏名

[illegible]

国語 解答用紙 その2

国語 解答用紙 その2

受験番号
氏名

氏名

問
1
1